

**山鳥坂ダム・鹿野川ダム環境検討委員会**  
**第8回動植物の保全措置に関する専門部会**  
**議事概要**

日 時 平成26年12月8日 13:00～14:50  
会 場 山鳥坂ダム工事事務所 鹿野川ダム管理庁舎 会議室  
出席者 (元)愛媛大学教授 酒井委員  
愛媛大学大学院理工学研究科 准教授 三宅委員

**1. 山鳥坂ダムにおける環境影響評価および保全措置の経緯**

- ・ 重要種の対義語として普通種という用語を用いているが、普通種とはどこでも見られる種の事を指す。重要種になっていなくても、あまり見かけない、珍しい種もいる。普通種は、昆虫類が分かる人には違和感がある言葉である。何か他によい言葉を考えたらどうか。

**2. 保全措置対象種における現地調査結果および保全措置の概要**

**2.1 現地調査結果について**

- ・ 調査によってこの地域のアオサナエの分布が分かっている。良い調査結果になっている。
- ・ 上流側の広い範囲で生息環境が維持できれば、アオサナエの生息も一定量は維持されると考えられる。

**2.2 保全措置の方針について**

- ・ サーチャージ水位の区間は通常の河川環境ではなくなる。この区間で試験的に整備を行い、この結果を上流側での整備に反映するという方向が良い。
- ・ 上流部は県の管理と聞いている。県と調整し、アオサナエの保全を円滑に進めていくことが望ましい。
- ・ サーチャージ水位以下の区間では、流入部の一時的に止水域になる場所の水際は利用されるかもしれないが、現時点の情報では不確実である。
- ・ 上流端部での生息可能性を明らかにするために、鹿野川ダムでの生息情報を収集、調査することは重要である。
- ・ 生息が確認されている既存の生息地に移植を行っても、一時的に生息密度は上がるが、その後、平均化されて以前と同じ程度の密度となる可能性が高い。このため、生息環境整備を実施した場所を中心に移植することが望ましい。
- ・ 洪水による攪乱も考慮して場所を設定する必要がある。
- ・ サーチャージ水位から常時満水位の区間は一時的にしか湛水しないということであれば、一時的な湛水を経ても幼虫の生息が可能かどうかという点が論点となる。
- ・ 生息環境整備については、幼虫の生息環境に加え、産卵環境等についても検討すること。
- ・ 生息環境整備を行い、一回洪水が来て、どのように土砂が動くかを把握し、次の産卵期までにハビタットが形成されているかどうかを確認し、必要に応じて再整備を行ってから移植等を実施する必要がある。整備をしてすぐに移植をしてしまうと、失敗する可能性がある。

- ・ 現在のアオサナエの生息範囲の半分ほどがダムによって消失する。消失する生息環境がダムの上流部で担保されないと、ダムの影響がないと言えない。
- ・ 解析結果を保全措置に反映させることができれば、ハビタットをどの程度増やすのかといった問題に対して定量的な検討が可能となり、非常に効率的である。
- ・ 特定の生物を増やすために自然の河川区間を改変するというには議論が必要である。例えば、オモゴミズギワカメムシが生息していた環境を改変して、アオサナエだけに注目した整備を行うという手法は、地域の環境を考えた際、適した保全措置とは言い難い。そのため、上流側において、既に人為的な影響により環境が改変されている区間を対象として整備を実施するのが良いだろう。

## 2.3 その他

- ・ 「愛媛県のトンボ」という本を作る際に、県内のデータをすべて収集して整理しているので、参考にされたい。

## 3. 重要な種の現地調査結果概要および愛媛県レッドデータブック 2014 公表に伴う対応について

### 3.1 現地調査結果について

- ・ アイヌハンミョウは県内に広く分布しているので愛媛県レッドデータブック 2014 には記載しなかった。
- ・ キベリマメゲンゴロウの愛媛県内での確かな記録は山鳥坂ダムの調査のみであり、分布が明らかとなっていないことから、愛媛県レッドデータブック 2014 には記載しなかった。キベリマメゲンゴロウは同定間違いを起こすような種ではない。キベリマメゲンゴロウは長距離移動をせず、誰かが放したことも考えにくいから、偶発的に出現するという表現はおかしい。これまで再確認できなかった理由としては、生息密度が極めて低いか、あるいは確認された環境が破壊されてしまったかのどちらかであろう。定着していないとは言えない。

### 3.2 愛媛県レッドデータブック 2014 公表に伴う対応について

- ・ オオヨシノボリの調査手法についてだが、タモ網の調査では、確認効率が悪い。関係機関と調整し、可能であれば、ゴリ網や電気ショッカーによる採捕などの調査手法を採用した方が良い。
- ・ 溪流に生息するアマゴが出現し始めるところ付近までは、オオヨシノボリが生息している可能性が高い。横通川合流点より上流側で溪流的な環境となるのであれば、調査範囲の上流側を横通川合流点までに設定する事で問題無い。
- ・ オオヨシノボリについては、愛媛大学に詳しい方がいるので助言をいただくこと。
- ・ アオアトキリゴミムシ以外のアトキリゴミムシ類 3 種については、県内での生息数は少ないと考えられるが、里山を主要な生息環境とするため、その指標として愛媛県レッドデータブック 2014 に記載したものである。一方、アオアトキリゴミムシについては、もともと生息数が少ない種であるとともに、里山地域よりも高所を生息環境としているため、追加調査の対象から除外してもいいか再検討が必要である。
- ・ 昆虫類の現地調査の対象種や対象から除外した種に関しては、アオアトキリゴミムシ以外は問題ない。

以 上